



ピクタインダクン

(おさみがりにぼし)

第 31 号

発行日 2021年7月1日

発行人 矢代 しず

秋田市御野塩7-1-29-305

緑

しずかな山間の

ゆるやかにうねる緑の海は

人びとを包みきれないほどの

おおらかな心をもつ

ブナの葉のカーテンに透ける

初夏のひかりが

くぼんだ緑の水たまりで

まだらに揺らいでいる

劣化したヒステリックな音

こすれあう金属性のことばも みんな

心地よい色に染まっていく

ぼっかりあいた樹間からのぞく

まるい手鏡のような青い空では

野鳥の音譜がはずんでいた

詩篇

私を貫いた

40年前の冬

私は

遠い地の

明るい広縁で

安寧が描かれた

1000ピースのジグソーパズルの

最後のピースをはめて

喜びにひたっていた

幸せのつづきは

明日もある――

35年前の春

突如

東の空に

鋭い閃光が走り

光は

空と地とのあいだに

深い悲劇的な亀裂を生じさせた

25年前の夏

南の島の海に潜り

群れなす魚と戯れた

光る海は

果てしなさに満ち

見知らぬ風景に

心をひらいた

セルリアンブルーの海面下で

人生の凧を味わった

19年前の秋

空の石が

私に重くのしかかった

薄暮色の虚ろな光

視線を遮る厚い翳

私は

不安をかき消す

呪文を

病院の天井に貼りつけ

毎夜唱えていた

が

呪文は剥がれおち

悶えるベッドに

ふり積もった

それは詩よ！

だれかの声

私は

夢中でことばを拾いあつめ
紙切れに書きとめた

2年前の冬

ようやく

傷む過去を

詩篇に編んだ

私をつなぎとめたのは

詩のことば

苔むし色に

氷結した

心が

まるく

とけてゆく

令和3年の春

私の海に

重石いかりをおろした

難破船の歲月
を

白く泡立つ波は

沖合へと

運んでいく

秋田の冬

わたしが生まれる前から

冬は白々と饒舌だった

秋田の 飽きるほど降る雪は

じわじわと色を消しながら

野を 山を 村を 人を

つめたい器に封じ込める

緊張に満ちた冬を

村人は

昏い雪室のなかで過ごす

色をなくした風景は

一面の白い沈黙

冬は気紛れだ

怒れる風が地上を駆け

雪を巻き上げると

ざわめく雪は

一夜にして

厚みのある層の風景をつくる

重い雪は家を軋ませ

雪の壁は集落を孤立させる

が一瞬しずまった

雪晴れは

雪下ろしの合図

村人は一斉に

シャベルを持ち屋根に上がる

冬は一篇の詩だ

凍てつく夜は

ストーブの前で

赤い火のぬくもりに詩情の手をかざす

長い冬の秘めた感情に心を澄まし

北窓の雪の結晶のことはを反芻する

やがて

日脚が延び

光がつぶやきはじめると

雪も崩れながら溶けていく

軒下の氷柱の針金も細くなる

雪の着せた白塗りの

道も 村も 山も 野も

季節の色合いを現すのも間近

冬は白い衣を脱ぎ

深くさみしい景色から

なごやかな色へ

季節のパレットには

一揃いの多彩な絵の具！

秋田の春は一度にやってくる

黒い土のなかから

きみどりの呼吸が聞こえてくる

まもなく

自由な魂を宿した

春が

墓参り

三月二十日

県南へ向かう

乾いた道には

豪雪の痕跡はなく

黒く

まつすぐに伸びていた

だが

市の中心部から離れた

田んぼ一面は

まだ

冬の深い眠り

雪野原が広がっている

墓所は

こんもりと盛られた

だれもない

しろい静寂

に

つまれている

墓石

卒塔婆

地藏堂

は

雪を被り

死者は

昏い雪

に

閉じこめられて

墓じまいされた

父や母

兄夫婦

墓の記憶

に

合掌する

根絶やしされた

死者の

後ろ姿が

浮かび

土の喉

の

底

から

絞り出された

声――

なぜ？

答える

すべもない
問い

死者のうえを

無情

が

通り過ぎていった

徒然のエチュード 28

①

山道を車で走行していると

前方に

長い枝が ブラリ

あつ ぶつかる！

思わず

頭をすくめる

わたし

とつさに身をかわすのは

人間の習性

無傷の車と

わたしは

苦笑い

②

「金を取って引退する」

これは新聞の見出し

なぬ！

カネを取って……

読み進めると

「金メダルを取って引退する」

あゝ

勘違い！

メダルを逃してしまったわい！

③

ついにやっちゃったゝ

裸眼に眼鏡の

四つの眼をもってしても

防げなかった

ケアレスマミス!!

ボケの

矢代レイ

シヨック

(>_<)

④

四月

新聞記事に惹かれて

下浜の

珠林寺を訪れた

境内には

色とりどりの

クリスマスローズが

いっぱい

清楚で

気品ある姿は

冬の貴婦人とも

うつむき加減に咲く

可憐な

白い花は

世界初新品種の

舞妓高杉まいこ

花壇を巡る

散策路は

杉皮屑を敷いていて

足裏にやさしい

手入れもよく

思いやりに満ちている

花壇に

春のひかりがこぼれて

蕾の膚にしみこみ

今にも

顔がほころびそう

クリスマスローズの里は

明るさに満ちていた

【母の句】

手紙の束を解くと、十九歳の時にもらった父からの手紙や、たくさんの母の手紙。読んでみると、当時のことがありありと思い出される。

このなかの一通の手紙には、長姉夫婦と友人に寿司屋で誕生日を祝ってもらった、と書かれていた。文末にあった二句は、その時に詠んだ句なのだろう。

これまで掲載した分と合わせて母の句は、二六四句となった。

・平成21年9月13日

葉牡丹や渦の中なれ清しけりすが

十七夜絆ふかめし誕生祝

【ご案内】

矢代レイ 詩展 ― 詩を楽しむ ―

日時 7月1日(木) ～ 7月30日(金)

時間 9時～15時 無料

場所 秋田銀行本店 ロビー

秋田市山王3-2-1

なお、土曜日、日曜日、祭日はお休みです。
お問い合わせは、矢代レイまで。

☎ 090・1935・1180

【訂正】

前号（30号）で誤りがありましたので、お詫びして訂正いたします。

・ 8 頁下段 7 行目

（誤）あきた文学資料（正）あきた文学資料館

・ 9 頁上段 8 行目

（誤）古今和歌集（正）後拾遺和歌集

・ 9 頁上段 11 行目

（誤）新古今和歌集（正）山家集

【あとがき】

国内の新型コロナウイルス感染者数と死亡者数が連日発表されるなか、聖火ランナーが県内を走り抜けた。

思い起こせば、一九六四年の東京オリンピックの時は夢と希望の聖火を心から歓迎し、日本中が活気にあふれていた。

当時、中学生だったわたしはテレビにかじりつき、秋田の誇りの小野喬氏の選手宣誓を食い入るように見つめていた。

高く鳴り響くファンファーレが明るい青空に吸いこまれていった光景が、今でも胸に刻まれている。

コロナが収束し、今夏のオリンピックが普通に開催されていれば、現場で応援できたのにな——。

